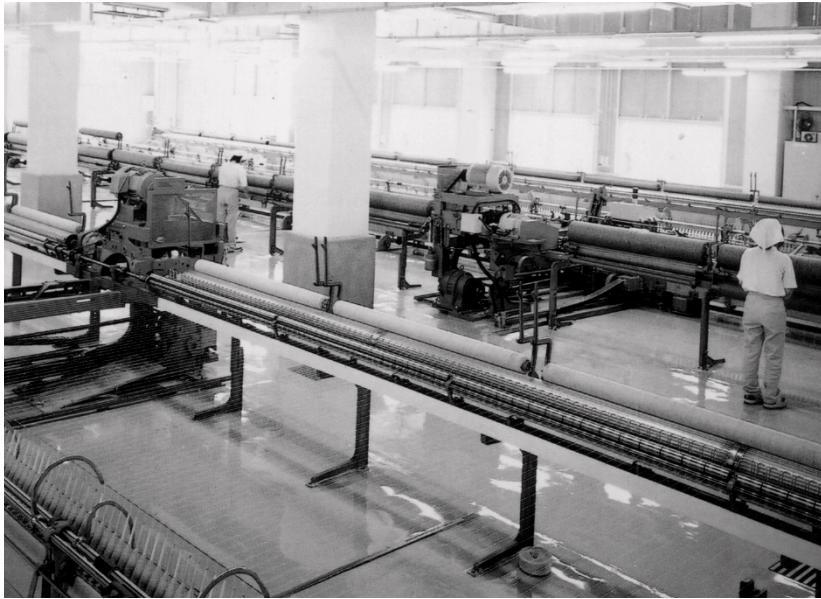


深喜毛織(株)  
見学

■日時 2001年12月14日 (金)  
■参加者 正会員15名、賛助会員1名、他5名

組織交流部会 (関西)



コンピュータ制御—ミュール精紡機



アザミの実による湿式起毛 (Raising)

針やチーゼルの実によって、毛織物の表面から毛を起し、保温性・柔らかさ・美観などを持たせるよう整えます。

メーカーとの接点の少ないフリーランスの人。次の時代を背負う学生さん。業界での新人21世紀の繊維工場のあり方を知りたい人。ひとそれぞれの思いで参加してほしいと深喜毛織(株)工場見学を企画しました。神奈川からきてくれた新人の高橋さん。産学交流セミナーに参加した京都精華大学の学生さんなどいろいろなジャンルのTDA会員の参加がありました。

深喜毛織(株)は日本初の毛織物設計、開発、製品でISO9001(1998)、環境マネジメントでISO14001(1999)、2000年1月に工場内のエネルギーを自然エネルギーに導入した新工場設立とテレビ、新聞などで話題になった工場です。

最初に案内されたのが資料室。深喜毛織で作られた毛織物が年代別に整理されファイルされています。1945年、1964年、1970年と見学者各自の思いでサンプル帳を開く。歓声があがる。その時代の流行が観れる。色柄、織りかた、素材などファイル帳のなかに詰まっている。テキスタイルデザインの基本姿勢が感じられ、また社員教育のためにと設けられたB反のハンガールームがありました。その原因を明らかにし、クレームのない製品を作る。ここにも高品質の製品をつくるという企業姿勢を感じる。

工場内に入ると明るく、繊維工場でよくみられる繊維屑もなく、クリーンな環境である。原毛から製品まで一貫した生産ラインを順追って見学する。トップ染めされ、無燃の糸が、シュツ、シュルシュルとアコーディオンのように動くミュール精紡機によって撚られ、紙管にまきあげられていく。整経。これだけが手作業の綜こう通しなどの過程を経て織られていく。仕上げ工程のなかでのアザミの実によって毛織物の表面から起毛し、毛織物の表面に光沢、ウェーブ状に仕上げられる湿式起毛。昔、泉大津はアザミの花が多く栽培され、それがもとで毛織物の産地となったといわれています。一度しか使えないので、アザミの栽培を特別に頼んでおられるとか。

また針による乾式起毛もありました。手作業でしていると思っていたマフラーの房作りが簡単にすっとできていく様子など、見ごたえが多くありました。また工場の中で働いておられる方々が見学者の私たちに暖かく笑みをもってむかえてくださったのもうれしかったです。その後、質問タイムで深喜毛織の深井専務さんから見学者の質問に答えていただいた中にひとつひとつできることから正していく。との答えが印象に残りました。それが環境を配慮した自然エネルギーの採用。また一例だが原毛の入っていた麻袋を緑化マット、残り生地やサンプル生地を福祉施設などに提供し、ぬいぐるみづくり等の資源の有効利用なのだと確認しました。

見学終了後、皮肉にもかつて毛布工場があったところにできたエスニック風創作料理の店「チョップスティックス」で参加者の懇親会を持ちました。

(リポート 平岡美子)



懇親会 (チョップスティックスにて)